

なぜ馬の埴輪は多く、牛の埴輪は少ないのか？
～現代史までにおける馬と牛の比較～



馬の埴輪

VS



牛の埴輪

中央中等教育学校

ID:3430 吉永 達哉

1 埴輪王国群馬県

国宝や国指定重要文化財に指定されている埴輪のうち、なんと45%が群馬から出土している。中でも、県の名前にも入っている「馬」の埴輪も数多く出土している。交通の要衝地だったことと群馬の土地が古くから馬の飼育に適していたからだ。東日本へ勢力を広げたかったヤマト王権にも重要な地域として認められた結果として豪族が多くの古墳を作った為、たくさんの馬の埴輪が出土された。



← 写真①

上空から見た太田天神山古墳(群馬県太田市)



↑ 写真②色々な埴輪

写真③今の群馬県 →

2 群馬県の由来

およそ1,300年前、藤原京(694~710年)の時代の資料によると、現在の群馬県の中に「車評(くるまのこおり)」(「評」は大宝律令によって「郡」となる)と呼ばれていた地域があったとされている。「車」とはここを治めていた「車持君(くるまもちのきみ)」と言う人物の名前が由来。「車持君」は馬を多く献上したところからその姓を拝領したと記載がある。「車」とは乗り物、つまり「馬」。当時は今のように自動車や電車はなかった。馬は速く移動したり、物を運んだりできるとして大切にされており、馬=車であった。群馬県一帯の古墳からは多くの馬具や馬骨が出土しており、この地域で多くの馬が飼われていたことがわかっている。更にその馬は渡来人が朝鮮半島から持ってきて、この地で育て増やしたと言われており、一説には「車持君」は渡来人とも言われている。



奈良時代に入るとすぐ、和銅6年(713年)の諸国の風土記編纂の勅令により、国・郡・郷名はその土地にあった漢字二文字で表すことに。国名「上毛野国(かみつけのくに)」は「上野国(こうずけのくに)」に、郡名「車(くるま)郡」は「群馬(くるま)郡」に改められた。

群馬県の県名が初めて使われるようになったのは、第1次群馬県が成立した明治4年10月28日。これは、明治4年の廃藩置県を受けて、高崎・前橋の大部分を含み大郡であった群馬郡を県名とすることがふさわしいと判断されたことによる。これにちなんで、10月28日は群馬県民の日となった。



図11 上毛野国主要豪族分布推定図(尾崎喜左衛門氏作)

← 写真④ 上野国主要豪族分布図

↓ 写真⑤ 魏志倭人伝

3 いつ日本に牛や馬がやってきたのか

魏志倭人伝によると当時の日本は「牛馬なし」と記されている。遺跡発掘の結果からは、牛馬が日本で広まったのは5世紀半ば、古墳時代中期になってからとされている。

また、渡来人が農耕や干拓といった土木技術や、乗馬の風習を伝えた際に連れて来たとみられる。



4 牛と馬はどうやって日本にやってきたのか？

前記の魏志倭人伝に「牛馬なし」と記された日本。どうやって牛・馬が古墳時代の日本に渡来したのか、またその時期と経路の記載がある資料によれば、遺跡から出土した牛・馬に関わる遺物を全国的に調査し牛・馬の出土骨、歯を肉眼的、計測学的に検索、在来牛や在来馬のものと比較が行われている。

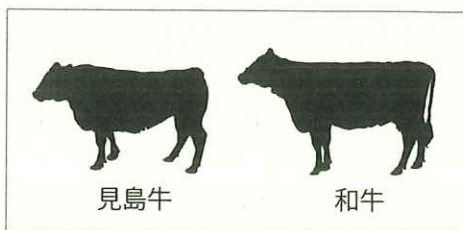
①牛・馬の骨や歯の出土調査は、各都道府県からの報告や文献ならびに現地調査によって行われた。牛の出土は、全国で213カ所でみられ九州、関東が多く、馬は475カ所からの出土で、やはり関東が多い。また、時代別では、馬と共に中世が最も多く、ついで平安、古墳、奈良の順である。弥生以前のものも報告されているが、現在のところ東京都伊血子貝塚(弥生中期)の牛頭蓋骨が最も古く、確実な出土例である。



写真⑪見島牛



写真⑫口之島牛



見島牛

和牛

写真⑬見島牛と和牛の違い(シルエット)

②出土骨の形態は、牛では在来牛である見島牛(山口県萩市)や口之島牛(鹿児島県鹿児島郡十島村、トカラ列島)のものに似ており、また、馬では御崎馬(宮崎県串間市)やトカラ馬(トカラ列島、奄美諸島)に類似し、推定体高は128cm前後で、中型馬に属するものが多いが、小型馬も含まれている。

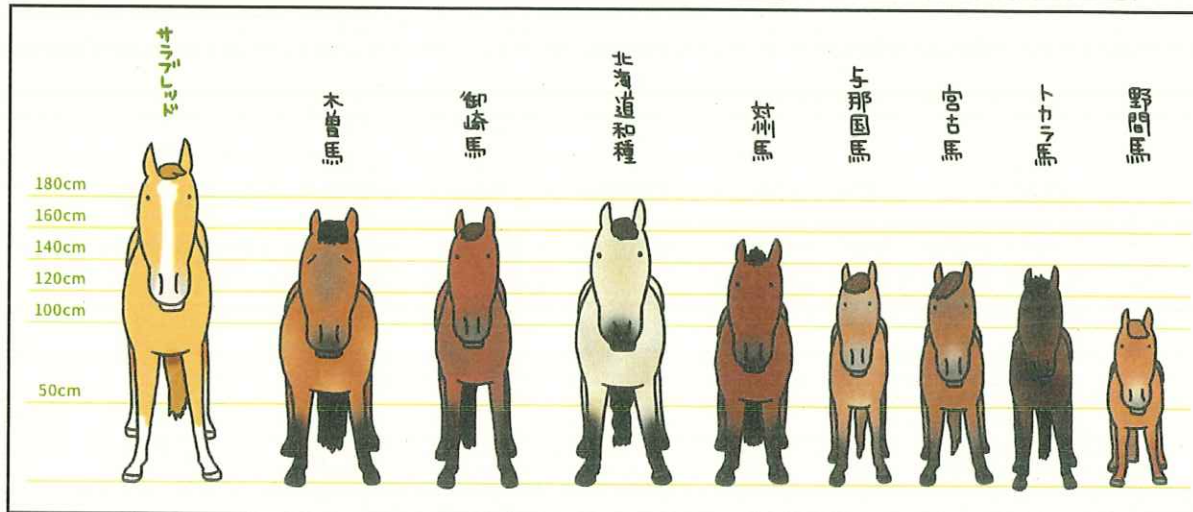
↓ 写真⑭御崎馬



↓ 写真⑮トカラ馬



↓ 写真⑯サラブレッド



↑ 写真⑰馬の大きさ比較イラスト

③馬具の出土状況は、全国で1265カ所の遺跡から出土しており、地域別では九州の368カ所が最も多く、ついで関東、近畿、中国の順。また、馬具は時期的には4～5世紀初頭に古墳の副葬品として出現し、5世紀代に分布が広がり、7世紀には古墳の減少と共に、その出土数も激減する。

④埴輪馬の出土は、全国で297カ所にみられるが、関東が圧倒的に多く、170カ所を占め、ついで近畿、九州であり、5世紀末頃から出現し、造形的に最も充実したのは6世紀である。祭祀に用いられたとみられる土馬は、奈良、平安時代に最も多く、全国589カ所のうち、328カ所が近畿地方で、特に平城京、平安京など古都に多い。

以上の調査研究からわが国の牛、馬は、弥生以降に朝鮮半島を経由して渡来し、当時の人々に飼養させていたことが示唆された。



↑ 渡来人が日本へきたルート図



↑ 渡来人が使った丸木舟

5 なぜ牛の埴輪は少なく、馬の埴輪ばかりが作られるようになったのか

色々な動物埴輪が出土する中、牛の埴輪は滅多に見かけない。牛の埴輪の出土例は、兵庫県朝来市を含めて全国で数カ所しかない。牛馬がほぼ同じ時期に広まったのに、牛形の埴輪が少ないのは何故だろう。

機械化が進む近代まで日本の農耕に必要とされた牛馬であるが、古代の人々にとって違いがあった様だ。

古墳に眠る有力者は牛も馬も飼ったかもしれない。

古墳は墓の役割以外に死者の魂がたどり着く「あの世」を表現したものという側面が

あり、埴輪はその世界観を描く重要な役割を担っている。

例えば円筒状の埴輪は、食事を入れたつぼや台を表す。家形であれば魂が宿る場所で、数多く並ぶ場合は有力者が住んだ宮殿を表す。また、災いを避けるため武具状の埴輪で防御を固め、あの世で身の回りの世話をするという人形もある。

一方、牛の埴輪は荷物の運搬などを担った有力者の所有物にすぎないが、馬の埴輪は権威の象徴。いわば、トラクターとスーパーカーのような関係で、馬の埴輪は力と権勢を表すために多く作られた様だ。



写真⑥色々な動物埴輪



写真⑦牛の埴輪



写真⑧スーパーカー



写真⑨トラクター

6 牛が馬より活躍できる時代はあったのか？

時代が進み、奈良・平安の時代になると土馬という馬形土人形が雨ごいなどのお祭りに本物の馬の代わりに使われており、川の跡などで出土している。農耕具でも馬鋤はあるが、牛鋤はあまり文献に出てこない等、牛は中々歴史に出てこない。

平安時代の貴族の乗り物は牛車であったが、これは当時の道路が舗装されていないことと、貴族は移動距離が少なかったのも、あまりスピードの出ない牛のほうが乗り心地が良く適していたからであった。そのため、応仁の乱以後には貴族のあいだでも牛車は廃れて消滅してしまう。

武人の時代になると乗り心地よりも、移動距離が重視されたこと、スピードが求められたために馬の需要が増えていった。

↓ 写真⑩土馬



※牛と馬の比較表

牛	馬
力はあるがスピードが遅い	牛より仕事が早い
馬の3倍近い量の草が必要 (1日約50キログラム以上)	あまり餌を必要としない (1日約15キログラム程度)
毎年子供を産ませて育てて売ることができ相当のお金になる	牛と比べて病気をしやすい
水はあまり飲まない	水を沢山飲む

(1日で約20リットル、 しかし乳牛は70リットル以上の水が必要)	(1日約30リットル)
--------------------------------------	-------------

上記の表のとおり、牛と比べ馬の方が病気になりやすく飼育にも手間がかかるというデメリットがあったにもかかわらず、仕事の早い馬の方が重宝されていた。

また、日本は近代まで肉食禁止であった為に、乳製品や肉を飲食する習慣が無かったこと、餌や水を馬の方が必要としなかったことから、牛がさほど増えなかった要因なのではないだろうか。

7 日本は鎖国時代まで肉食が禁止されていたと歴史の授業で 学んだが、いつから始まったのか？

また、古墳時代は肉食をしていたのか？

肉食禁止の始まりは、675年に天武天皇が肉食禁止令を発令したからだ。

肉食禁止令が発令された背景の根本には、仏教の教義である殺生戒があり、その他に、家畜を主に食していた渡来系の官吏や貴族を牽制するためという説や、動物をそもそも「けがれ」として見なすためという説がある。

食するという以前に、そもそも牛を解体することが有用な物を解体することなので厳重処罰の対象とし、国民の間に肉食は「けがれ」であるという固定概念を植え付けることになった。

鎌倉幕府では1203年、北条政子の指示によって諸国に狩猟禁止令を発布している。

戦国時代の豊臣秀吉、徳川家康はキリシタン禁止令を出し、弾圧の大きな理由として「牛肉食の慣行」を挙げている。

その後も江戸時代には徳川綱吉が肉食禁止令を出した。

それ以降は禁止令こそ出されていないが、人々の心の中に「肉食=悪しきもの」という観念が刻み込まれた。

時代は流れ鎖国が終わった後、西洋文化が一気に押し寄せた。それと共に肉食禁止令が廃止されたため、肉食文化が発展することになり西洋文化と日本文化を混ぜ合わせたようなバラエティに富んだ料理も生まれた(ハンバーグ、とんかつ、オムライス、カレー、コロッケ等)。

肉食禁止令が出る前の古墳時代は、前記した魏志倭人伝に《死停喪十餘日當時不食肉》と「日本人は喪中には肉を食べない」と記載がある。逆に言えば、普段は当然のように食べていたというこの様である。

ただし、現在の様に毎日肉食をしていたわけでは無い様だ。

当時は冷蔵保存が出来ない為、屠殺後はその場ですぐ食べるか塩漬け後に乾燥肉として保存するしか調理方法が無かった。しかも、調味料として大切な塩の大量精製法が確立していなかった当時、塩はかなりの貴重品であったことが想像される。(古墳時代は、干した海藻に海水をかけてかん水を探り、土器で煮詰めて塩にしたのではないかとされている。)

古墳時代以前までは動物の臓器を食べることで有機酸塩やミネラル、ビタミンなどを摂取していた。時代が進み段々と臓器を食べることはなくなってきたものの、古墳時代も肉食=薬猟として考えられていた。当時、肉=薬であった。また肉の種類は、現代の私達が食している牛・豚・鶏ではなく、猪や鹿、雉を狩猟し食べていた様である。

機械のない時代、人の何倍もの力を持つ牛馬は大事な労働力であったことから、食べられるのはもっぱら老いた個体や怪我をして働けなくなったものに限られ、元気な個体を食べるのは飢饉などのかなり切迫した状況であったと思われる。

肉を口にする主な機会は、年に数回行事として行われた狩猟であり、そこで狩った動物(猪・鹿・雉等)を加熱して食べていた様である。狩猟以外での機会は祭事であり、生贄として使用した個体(馬・牛・豚・犬・鶏)を、神事では火の使用が禁止されていたため基本的には生肉で、または酢と塩を使った膾として食べていたと考えられてる。(古来から馬が生贄とされてきたことが、現代の神社の絵馬につながっている。)

8 まとめ

牛と馬の力が同等(★)であったとして、馬の方が餌を牛ほど必要としないことや移動スピードを考えると、多少飼育に手間がかかったとしても馬の方が重用されたのであろうと考えられる。また、権力の象徴であることを考えると、トラクターに例えられる牛よりもスーパーカーに例えられる馬は、当時の権力者にとってとても大切なものであったに違いない。

出土した馬の埴輪は、豪華な装飾品が飾られていることから、貴重な財産であったことがわかる。また、財産価値だけでなく大切な労働力でもあった。当時の権力者は、馬への感謝と共に自分の権力がどのくらいあったかを示すために、装飾品をつけた馬の埴輪を沢山作り死後の世界の象徴としたのでは無いかと考えられる。

また、古墳に埋葬をする＝権力者であったことから、残念ながらトラクターと例えられる牛は庶民には愛されたかもしれないが、権力者の埋葬品としてはふさわしく無いと考えられ埴輪が作られなかったのでは無いだろうか。

★現在の計量法で認められている1馬力とは75キログラムのものを1秒間に1メートル動かす力のこと。他の動物の馬力を見てみると人間なら0.1馬力、ロバで0.3馬力、ウシで0.7馬力ほどに換算される。

馬の方が牛よりも力がある。しかし、牛が人間の7倍もの力があつたことに鑑みると機械化が進む近代までは人々にとって牛も馬も大切な労力であつたと考えられる。

※参考文献

群馬の由来 県名の由来 - ぐんまの概要 - 群馬県ホームページ
<https://www.pref.gunma.jp/>

牛馬の話 - Ouroboros - 東京大学
https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/ouroboros/03_02/gyuba.html

神戸新聞 「牛」の埴輪、なぜ少ない？
<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202101/0014034923.shtml>

昔の家畜 馬と牛
<http://www.simoyokote.sakura.ne.jp/nitijyou-sonota/siryou/umatousi.html>

KAKEN 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-01490018/>

和樂web 私たちはいつから肉を食べるようになったのか？

<https://intojapanwaraku.com> › rock

日本海学推進機構 丸木舟で海を渡った人びと | 海を越えた祖先たち

<https://www.nihonkaigaku.org/>

TBSテレビ もともと日本に「馬」はいなかったらしい...どこから来たの？

<https://topics.tbs.co.jp>

他

かみつけの里博物館様(群馬県高崎市井出町)に問い合わせをし、回答協力いただきました。